

創学舎ニユース

No.233

世界が敵にまわった日

小学校入学式の次の日であった。一人で登校する初めての日。学校施設の案内や校内でのルールの説明などがあつたと記憶している。お昼前には終了となり、同じ方向に帰る一年生が集められ、上級生の引率の下で集団下校しようとしていたとき、事件はおこつた。同じクラスの一年生の傘が私にあたり、「ごめんね。」と彼はぶつきらばつに言った。「いたくないよ。」少しムツとした私はそう返した。この一言がひきかねであった。彼は「ボス」だったのだ。

「おい。こいつ、なぐつても痛くねえんだつてよー！みんな来い！」わーっ！十人位だったろうか、あつという間に取り囲まれた。あちこちから、手や足がとんできた。一瞬何が起つたのか分らなかつたが、体の痛みで我にかえると、あとは恐怖、恐怖…。かばんも傘も全て放り出し、逃げた。どこをどう走つたのか分らないが、とにかく逃げた。「ギャハハハ！」「待てー！」「おもしろー！」追いかけてくるボス達の声を背にひたすら走つた。「つかまえろー！再び囲まれそうになったとき、突然目に入った一軒の古家。そこに飛びこんだ。一人の老女が出て来て、私を抱きしめた。その日の記憶はそこまでである。どうやって家に帰つたのか、私

の荷物はどうなったのか、そのあと私は何をしたのか…。何も覚えていない。世界が敵になった日である。

翌日から不登校が始まった。母は、懸命に私を説得したらしい。校長や担任にも訴えたようだ。担任の先生も何度か足を運んでくれたような気もする。はつきりとは覚えていない。とにかく私は悲しかった。そして怖かった。「学校なんか行くものか。」そう思いながら、私はずっと泣いていた。二・三日だった気もするし、十日くらいだった気もする。

そして或る日、担任の先生が迎えに来てくれ、母と私は一緒に小学校へと向かった。教室のドアを開けると、教壇の前に十人程の生徒が立つて下を向いていた。先生が私と母に、中へ入るよう促し、私を十人の生徒の横に並べさせた。先生はこの事件の経過を説明、私がどれほど苦しく悲しかったか、この日の登校にどんなに勇気が必要だったか、クラス中に訴えてくれた。それから、私をいじめた十人程の生徒達をどやしつけ、人をいじめることがどんなことなのか、説明した。私も、クラスメイトも、私をいじめた生徒もみんな、いつか泣き出していた。そして、いよいよ謝罪。一人ずつ私の前に来て泣きながら、声をふりしほって謝ってくれた。私は、ただもう目頭が熱くて、息苦しくて、でもきつとつれしくて言葉が出なかつた。それでも、何か言わなければならぬ。必死で言葉をさがし

た。「もついいです。仲良くします。」それだけ言つと、もう止まらない。次々に、涙がでてきて、しゃくりあげる。私をいじめた生徒達も、クラスメイトもみんな声をあげて泣き始めた。先生も母も泣いていた。私は、うれしかった。教室はいつか、拍手の嵐につつまれていた。

世界が敵になつてからどれほど経つていたのだらう。そんなことはどうでもよい。この瞬間、私はまだ世界とぎずなを結ぶことができた。小学校という場所に、私は改めて迎え入れてもらったのだ。

さて、私が、この事件で学んだことは多い。基本的に、人間は惨酷になれる可能性をもっていること。(その後、私をいじめた人達とは、大の仲良しになるのだが、)人はいい面もたくさんもっていること。世界が敵になつたとき、私を守ってくれる人がいて、その存在が本当に有難いこと(具体的には、老女と担任の先生と母)。特にこの和解の場面を設けた担任の先生の存在の素晴らしさ。人は、自分の周りの世界とつながりをもたないと生きていけないこと…。勿論小学一年生で、こんな分析ができようはずもないが、この事件は私の記憶から消えることはない、精神的な成長とともに、後から次々と意味づけされたことである。

ところで、その後の私はといえば、実はこの事件で受けた傷というものは少なからずあつた。まず、人と言ひ争いになりそうになると、自分

から引いてしまうこと。相手が悪いと思つても、黙つてがまんしてしまうこと。気が短くて手の早い奴といるときは、どこかピクピクしていること。その場の空気には、かなり敏感になつていった。

そして、小学一年生の六月。次の試験が私を襲つ。病魔であつた。学校で突然意識を失つてしまったのである。気がついたときは病院。何があつたのか理解できなかった。その後、小学校二年、小学校四年と、やはり意識を失い病院に運ばれることになるのだが、病院通いの日々が始まつた。主治医のところと大病院。何百回通つたのだらうか。後で知つたが、脳の病気があつた。朝昼晩と薬を飲む生活が、中学三年まで九年間続いた。私が具合が悪そうなのをみると、母や歴代の担任の先生、保健室の先生が過剰ともいえる反応を示すのを見るにつけ、私の中にはいつしか死の予感がめばえていた。自分の身体への不安は、性格的におどおどした部分を一層強くした。いじめられたことの傷と死の予感、この二つは私の性格の土台と大きな一部となつていたのである。(以下次号)

親子の関係は休載です。(小林)

教育「名言」の紹介(8)

ひとは自己の精神の最も大きなよりどころとなるものを、自らの苦悩のなから創り出しうるのである。

《出典》神谷美恵子(かみやみえこ)

(一九一四 九七)『生きがいについて』

解説 神谷美恵子は、一九五八年より七二年までの間、瀬戸内海の小島にあるハンセン病患者の療養所・長島愛生園(ながしまあいせいえん)の精神科医師として勤務し、数多くの患者との交流をもつことになった。その時の、生きることについて強い意欲を抱きつつ、療養の生活の中に深い精神的世界を形成していく人々との出会いに、彼女は大きく心を揺り動かされていくことになった。そうした感動の中から、この言葉は生成してきた。

この国・日本では一九九六年に至るまでの長きにわたって、ハンセン病患者に対して、予防という名の下に徹底した隔離政策がとられてきた。そのような政策に従って全国に設置された療養所でのいつ果てるかもしれない生活の連続の中で、ともすれば前途に立ちほだかる現実に打ちひしがれて、絶望と虚無との世界を彷徨ほうこうしつつ、生きるこの意味を見失いがちになる人々が少なくなかった。しかし一方で、同じ現実にも直面しながらも、心の奥底から発する豊かな生きる力、精神的生きがいをよりどころにして、自己の生命、人生に大きな意味を見出して、有限なそれらが燃え尽きるまで生涯を積極的に全うしようとする人々もまた、決して少なくなかった。そうした人々にこそ、自らの力でより大きく深い精神的世界へと飛躍するとい

う可能性が開かれていたと、神谷美恵子は認めていた。見出しの言葉に続いて、「知識や教養など、外から加えられたものどちがつて、この内面から生まれたものこそいつまでもそのひとのものであって、何ものにも奪われることはない」と述べているが、苦悩や絶望のさなかにおいて成立する切実なレベルでの学習にこそ、最も深い意味が認められると言う。

神谷美恵子自身かつて結核に罹患し、青年期の数年間を療養所に過ごしたことがあったが、その後、完全に治癒するという幸運に恵まれている。しかし、結核が治癒の困難な病であった当時、周囲には、若くして世を去らなければならなかった人々が多数あった。彼女のこのような生死の境界をめぐる体験が、やがてハンセン病患者のための活動につながるようになったのである。そしてその体験がことに、病やそこから発する苦悩を通して、大いなる生きがいを獲得し、その生を十分に全うしようとする人々の心の奥行きを微細な変化を、敏感に感じることのできる心の眼を養つことになったと言つべきであらう。また、「苦しみを通して得られた知的満足は、何もかもはじめから揃って与えられているひとの場合とは、くらべものにならないほど鋭く純粋なものにちがいない」という確信も、病の中にあつても自己を喪失せずに、それどころか生きがいを得て精神的に輝き高揚していく人々の姿を、そうした心の眼を通して確認する

ことのできた結果として生まれてきたと言つべきであらう。(アガトス教育研究所)

新たな出発

四月になり新学年が始まった。進学した人も、進級した人も新たな気持ちで出発したことだろう。ちょうど一ヶ月がたちその気持ちを忘れていないだろうか。ここで思い出して、また気持ちを新たにしてもらいたい。

さて、もつこ存知だと思つが創学舎ではこの春、小中学部各教室の担当講師が数名異動した。私も今まで教えていた教室を出て、新しい教室に移った。

今まで担当していた生徒と別れるのは、寂しいものだ。同時に何人も恋人と別れた気分である。できることなら無事に送り出してから別れたいというのが本音。しかし仕事をしていれば、こういつたことは定期的にあることなので仕方がない。これから君たちが新しい講師と出会い、さらに成長していくことを楽しみにしている。そして新しく担当する生徒諸君、これから一緒に頑張っていこう。

この時期は、多かれ少なかれ皆別れと出会いの時期である。特に進学した人は今までの人間関係から新しい人間関係の中へと飛び込んでいくことになったはずだ。友人はできただろうか。新しい人間関係は心地よいだろうか。

ひよっとしたらクラスや部活の仲間には、気の合わない人もいるかもしれない。そのときは、よく考えてもらいたい。確かに気の合う人だけ付き合っていくのもいいだろう。しかし、自分とは考え方の違う人、気の合わない人とも多少の人間関係をつくっていく必要がある。大人になるにつれてその必要性は一層大きくなる。そういつた人ともできるだけ心を開いて付き合っていくって欲しいものである。そういう人間関係も含めてこの一年はいろいろとあると思つが、自分なりに真剣に考え、できるだけ最善を尽くすよう頑張つてほしい。きっとその姿を友達や先生は見ている。そして認めてくれるだろう。共に頑張つた仲間は、一生の友となり、苦しいとき、壁にぶつかったときに必ずきみの助けとなつてくれるだろう。

最後に、われわれ自身もきみたちと同様に成長していきたいと思つている。お互い前に進みたいという気持ちを持った者同士、壁にぶつかったとき、続けるのが苦しいとき、協力し乗り越えていこう。この気持ちはどの講師も同じである。この一年共に頑張っていこう。(松永)

卒業や転校等で創学舎を離れる方にも、ご希望があれば、創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍した教室までご連絡下さい。